

# 麻薬使用の意識調査

—看護学生と看護師の比較

著者：綱脇 慎治，西川 まり子 准教授

所属：広島国際大学看護学部看護学科

(西川ゼミ)

# 目次

I : はじめに

II : 研究方法

III : 結果

IV : 考察

VI : 結論

# I : はじめに

背景

目的

# I はじめに

## 背景

- 平成22年度の薬物事犯全体の検挙者数は14,536人であった(警察庁, 2011).
- 厚生労働省の薬物乱用に対する学校教育面の取組は, 1998年薬物乱用防止五か年戦略が始まり2010年から薬物乱用防止戦略加速化プランである.
- 薬物教育の現状課題は, 自治体取組の地域差や学校の教育の現場での差が認められることである.

- 広島ダルク施設長の井上は(2011)薬物依存リハビリセンターの広島ダルクでは公的資金援助もなく施設長の講演資金のみで活動,薬物依存者のリハビリ活動の展開が拡大出来ない状況にある。
- 看護の場面で医療施設内では,薬物依存症の人との出会いもあるが地域で生活している回復期にある薬物依存症者との出会いはほとんどない(寶田,2009)。
- 看護師は地域まで見ることが出来る幅広い職種であり,病院,施設,地域連携することで薬物依存者支援に広く介入が可能となると推測できる。

# 目的

- 既存の研究では看護学生，看護師の薬物への意識，関心，教育に焦点を当てた研究は希少である。
- そこで本研究では看護学生と看護師に焦点を当て薬物に関する意識と関心，学習経験を調査することで薬物に対する知識や考えを明らかにし，地域医療を担う職業として薬物教育の必要性を考えていく。

## II：研究方法

調查對象

調查期間

研究期間

調查票

倫理的配慮

## II 研究方法

### ● 調査対象

H大学の看護学生30名のうち、回答のあった20名  
(回収率67%)。

対象年齢18～23歳(平均20歳, 標準偏差1.2)。

M 病院勤務の看護師 20名

(看護師11名, 准看護師9名, 回収率100%)。

対象年齢29～56歳(平均41歳, 標準偏差8.4)。

● 調査期間:2011年6月27日～2011年 7月 4日。

● 研究期間:2011年4月 1日～2011年10月21日。



- **調査票**

内閣府 (2010) による平成21年度インターネットによる青少年の薬物乱用に関する調査票を使用し，文献レビューから薬物の意識や学習経験に焦点を当て修正。

- **分析**

数字は統計ソフト JMP 9.

自由記述はText Mining Studio 4.0.

- **倫理的配慮**

無記名，任意で個人が特定されることなく統計数値で処理することを説明し了解を得た上で実施し，回答をもって了解を得たとした。

## Ⅲ：結果

- 薬物意識調査
- 自由記述

単語頻度分析  
ことばネットワーク

# Ⅲ 結果 薬物意識調査票結果

項目	看護学生		看護師	
	n	(%)	n	(%)
<b>薬物問題への関心</b>	n=20		n=20	
非常にある	2	(10)	0	( 0)
ある程度関心がある	16	(80)	8	(40)
あまり関心がない	1	( 5)	8	(40)
ほとんど(全く)関心がない	1	( 5)	4	(20)
<b>薬物乱用に関する意識</b>	n=20		n=20	
どのような薬物であろうと、どのような理由であろうと絶対にいけない	20	(100)	19	(95)
一回くらいであれば体に害はなさそうなので、いいのではないか	0	( 0)	0	( 0)
他人に迷惑をかけなければ個人の自由である	0	( 0)	1	( 5)
<b>薬物使用希望</b>	n=20		n=20	
ある	2	(10)	1	( 5)
ない	18	(90)	19	(95)
<b>使用理由</b> (複数回答)	n=20		n=20	
好奇心	1		1	
本、雑誌などの情報で薬物に興味を持ったから	1		0	
インターネットの情報で薬物に興味を持ったから	1		0	
その他	0		0	
<b>学校での薬物乱用防止教育</b>	n=20		n=20	
ある	20	(100)	12	(60)
ない	0	( 0)	8	(40)
<b>薬物乱用防止教育後の意識</b>	n=20		n=12	
非常に影響を受けている	8	(40)	1	( 8)
ある程度影響を受けている	10	(50)	7	(58)
あまり影響を受けていない	2	(10)	2	(17)
ほとんど影響を受けていない	0	( 0)	2	(17)

薬物乱用防止教育者	(複数回答)	n=20	n=12
学校の先生		16	9
警察関係者、麻薬取締官		11	2
青少年育成や薬物乱用防止教育の専門家		10	0
医師や薬剤師などの医療専門家		1	4
その他		1	0
覚えていない・わからない		1	1
回復した薬物体験者覚えていない		0	1

効果的な薬物乱用防止教育	(複数回答)	n=20	n=20
高等学校までの学校教育		18	10
短大・大学での教育や啓発		10	4
新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどの各種メディアを活用した啓発や教育		10	10
行政や警察による教育や啓発		7	3
家庭教育		4	10
教育や啓発における関係機関の連携		4	6
公民館、PTA, 自治会などによる地域での教育や啓発		4	0
職場での教育や啓発		2	1
保健所、病院、医療機関などによる教育や啓発		2	3
パンフレットやリーフレットなどを活用した啓発や教育		1	1

重要な薬物乱用支援者	(複数回答)	n=20	n=20
家族		20	18
友人		17	13
地域社会		11	14
医療機関		11	14
保健所などの行政機関		9	6
ボランティア、ボランティア団体		6	9
学校		5	7
警察		4	7

# 薬物意識調査票結果

- **看護学生の薬物問題への関心**  
関心がある割合は9割，看護師の関心がある割合は4割であった。
- **薬物乱用に関する意識**  
看護学生全員，看護師は9割以上が薬物乱用は絶対いけないと回答した。
- **薬物使用希望**  
看護学生，看護師9割以上が薬物を使ってみたいと思った事がない。
- **使用希望理由**  
看護学生は好奇心，本や雑誌など，インターネットの情報で，看護師は好奇心で薬物に興味をもっていた。
- **薬物乱用防止教育経験**  
受けたことがある看護学生は全員で看護師は6割であった。
- **薬物乱用防止教育後の意識**  
薬物教育経験がある看護学生，看護師のうち，薬物教育が現在に影響を与えているのは，看護学生9割，看護師6割以上であった。

- **薬物乱用防止教育者**

看護学生，看護師共に学校の先生が多かった。看護学生は，警察関係者，麻薬取締官，青少年育成や薬物乱用防止教育の専門家が多い。看護師ではそれらは少なく，医師や薬剤師などの医療専門家が多い結果であった。

- **効果的な薬物乱用防止教育**

看護学生，看護師共に高校までの学校教育，新聞，雑誌，テレビ，インターネットなどの各種メディアを利用した啓発や教育が多かった。看護学生，看護師共に少なかったのは保健所，病院，医療機関などによる啓発や教育であった。看護師では家庭教育が看護学生より多い結果となった。

- **重要な薬物乱用支援者**

大切と思われるのは看護学生，看護師共に家族，地域社会，友人，医療機関という結果になった。

# 薬物中止への提言

## Text Mining Studio4.0.1を用いての分析

- 看護学生と看護師に自由記述による質問内容。  
「薬物をやめるには、どうしたら良いと思いますか」
- 看護学生の全員と看護師20人中19人が回答。
- 薬物中止への提言を本研究では、単語頻度分析と、ことばネットワークの分析を行った。

# 薬物中止への提言：総文章の基本情報

## 看護学生

項目	値
総文数	78
平均行長 (文字数)	29
平均文長	11
延べ単語数	330
単語種別数	202

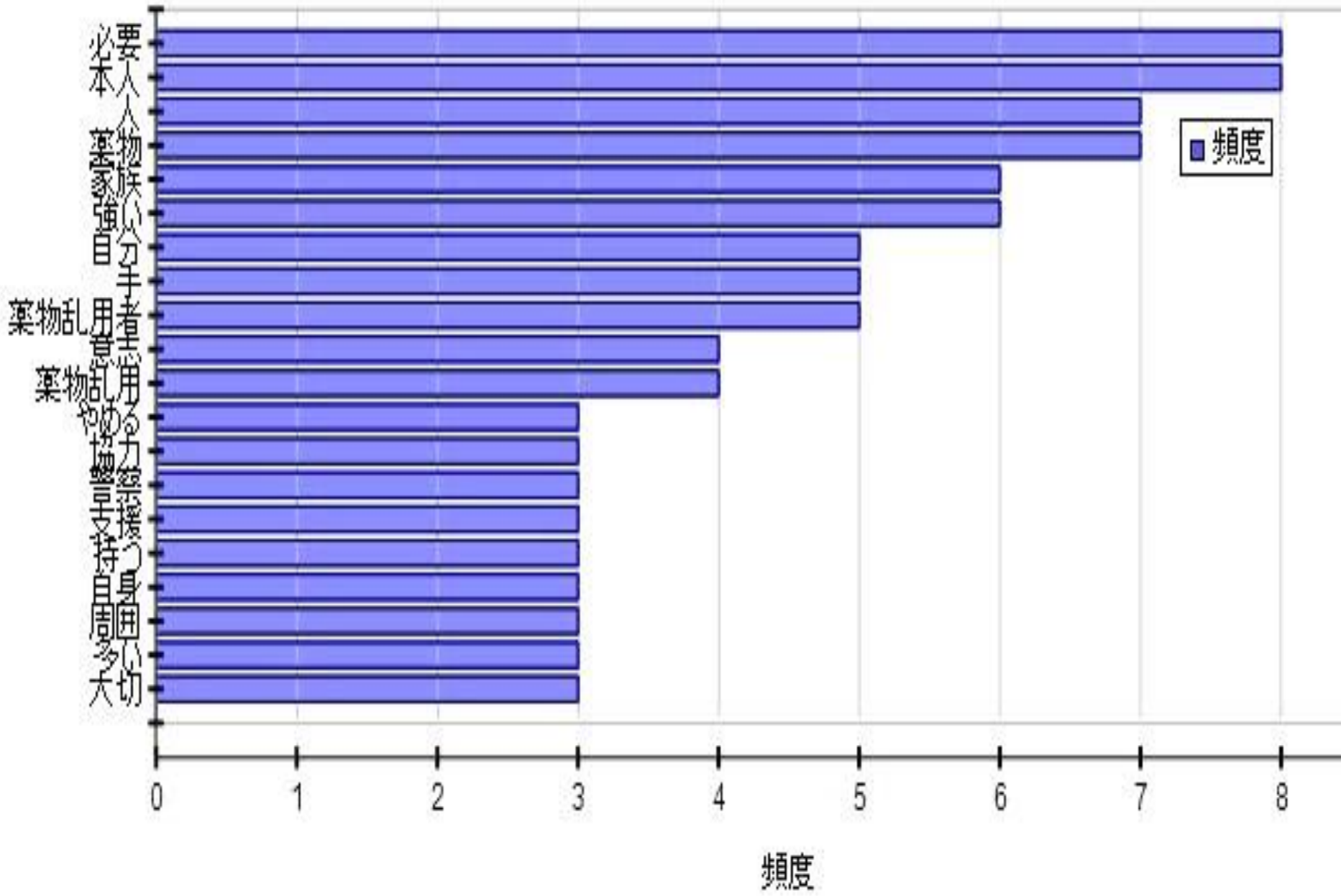
## 看護師

項目	値
総文数	86
平均行長 (文字数)	60
平均文長	14
延べ単語数	492
単語種別数	317

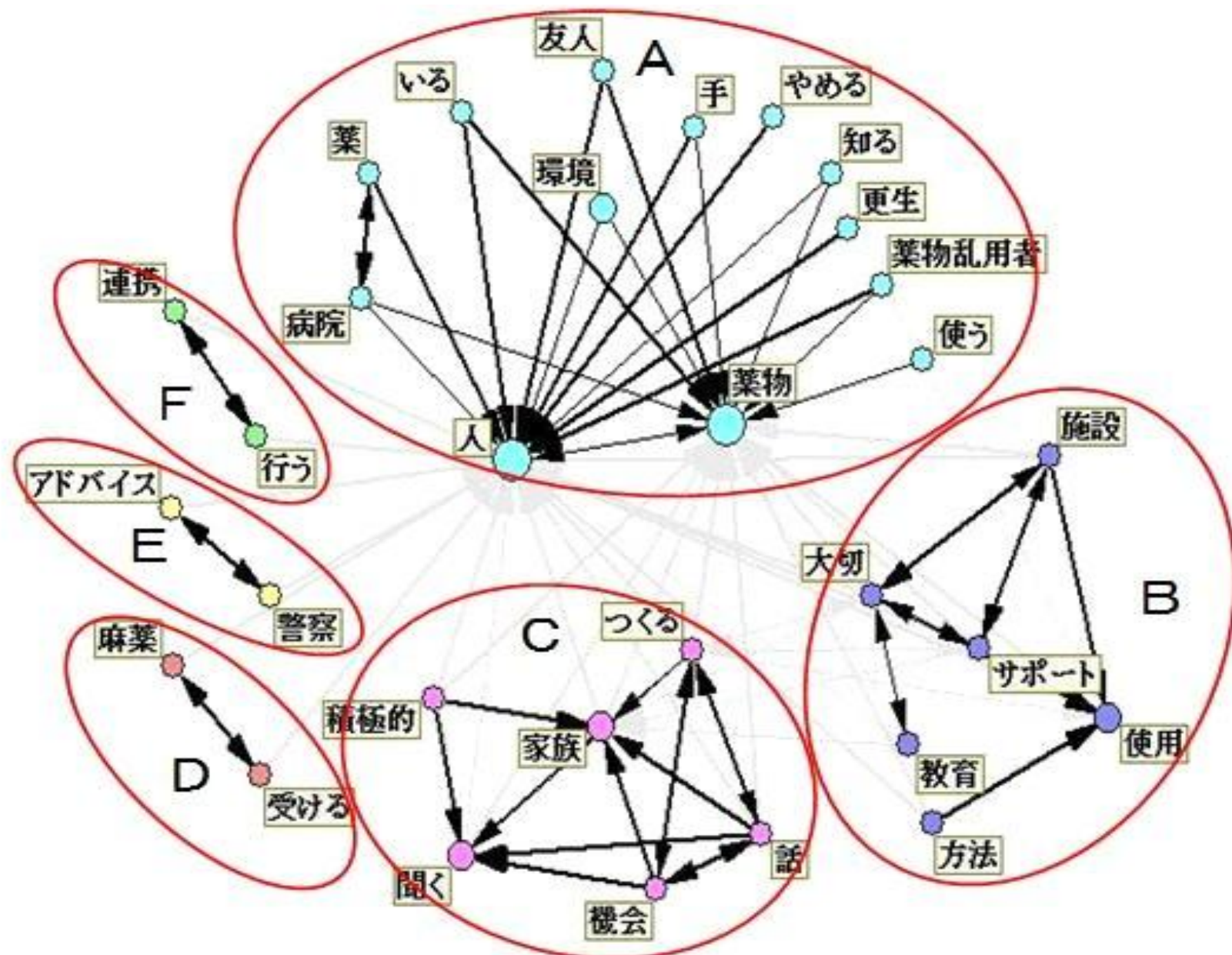




# 看護師：薬物中止への提言での単語頻度分析



# 看護学生：ことばネットワークによる薬物中止への提言



A：環境

B：サポート

C：家族

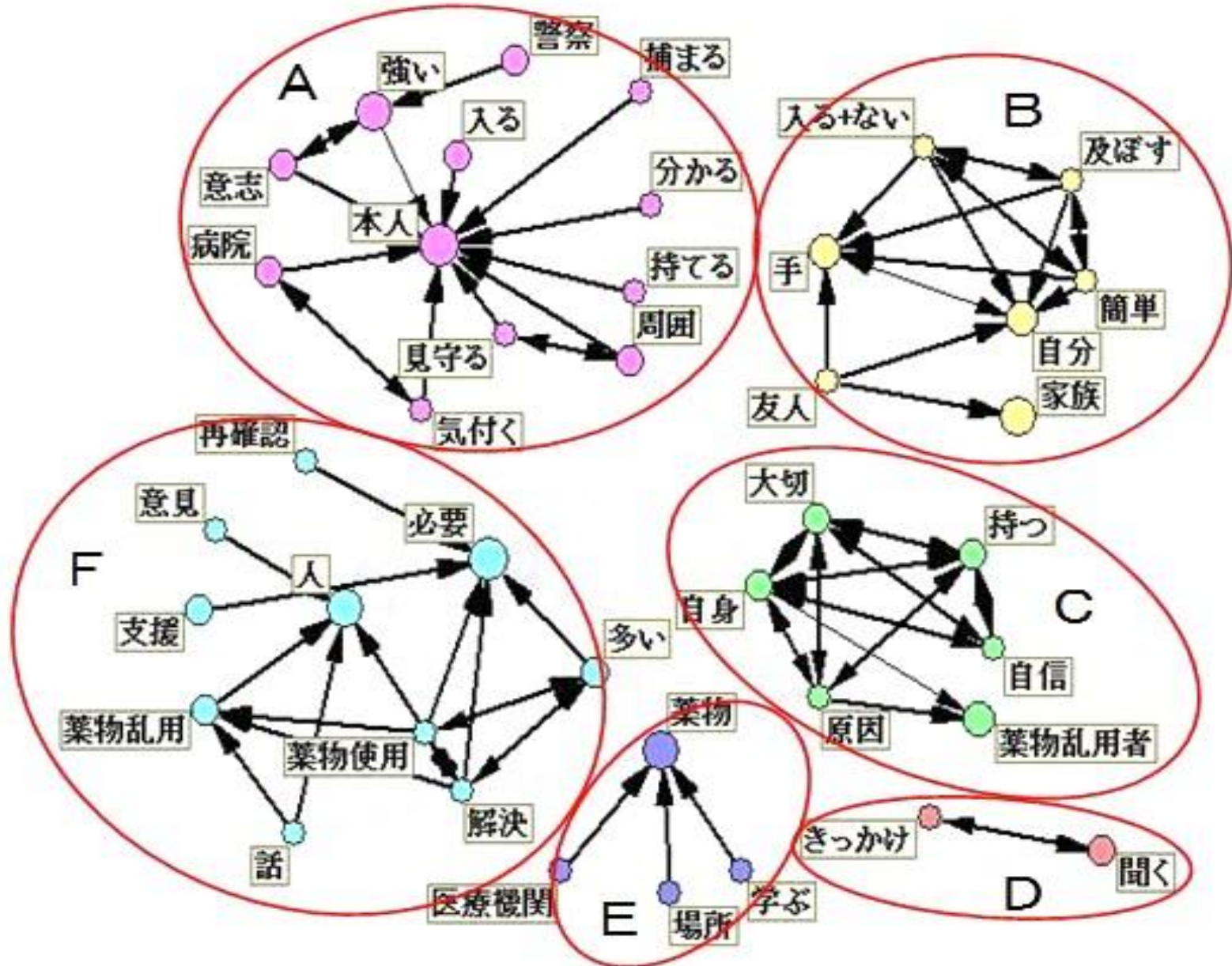
D：受ける

E：アドバイス

F：連携



# 看護師：ことばネットワークによる薬物中止への提言



A：本人    B：家族    C：薬物乱用者    D：きっかけ    E：薬物    F：必要

# 看護学生と看護師：薬物中止への提言での単語頻度分析結果

## 看護学生

- 人，薬物，家族，環境，使用，聞く，の単語頻度が多く結果であった。
- サポート，教育，病院，つくる，アドバイス，など周囲の環境を指している単語がみられた。

## 看護師

- 必要，本人，人，薬物，家族，強い，の単語が多い結果であった。
- 自分，意思，自身，持つ，大切，など自己の意識を指している単語がみられた。

# 看護学生：ことばネットワークによる薬物中止への提言 分析結果

- ことばネットワークによる薬物中止への提言からA, B, C, D, E, F, 6つのカテゴリーに分類し, 6つのカテゴリーから関連性のあるものに分類.
- A : 友人, 病院, 環境など薬物依存者の周囲の状況や必要性.
- B : 大切, サポート, 教育, 施設など薬物依存者の支援の場所.
- C : 家族, 話, 機会, 聞くなど家族関係の重要性.
- D, E, F : 麻薬, 受ける, 警察, 連携, アドバイスなど地域連携.

# 看護学生：ことばネットワークによる薬物中止への提言 例文

- A : 「薬物乱用者が相談しやすい環境」  
「友人が薬物に手を出さないように積極的に遊びに誘う」
- B : 「家族のサポート」  
「ダルクのような施設をもっとつくる」
- C : 「家族、友人が薬物に手を出さないよう会話をして、  
どうして手を出すか聞いてみる」  
「家族はもっと もっと会話をして、どうして手を出すのかなど理由など聞いてみる」
- D, E, F: 「薬物使用経験者で更生された方のアドバイスを受ける」  
「地域と行政の連携」

## 看護師：ことばネットワークによる薬物中止への提言 分析結果

- ことばネットワークによる薬物中止への提言からA, B, C, D, E, F, 6つのカテゴリーに分類し, 6つのカテゴリーから関連性のあるものに分類.
- A, C : 本人, 自身, 気づく, 持てる, 原因, 捕まるなど, 本人の意思が重要.
- B : 自分, 簡単, 手, 友人, 及ぼす, 家族など薬物に手を出さない信頼できる関係が必要.
- E : 薬物, 医療機関, 場所, 学ぶなど薬物依存者の更生場所出来る場所.
- D, F : 必要, 人, 聞く, きっかけ, 薬物乱用, 支援, 意見など薬物依存になる前に知識を学び薬物依存について学びと理解.



## 看護師：ことばネットワークによる薬物中止への提言 例文参照

- A,C : 「本人の意思次第」  
「周囲の見守り」
- B : 「支えてくれる家族，友人，恋人の助け，医療機関の支援が必要」
- E : 「家族，地域，社会の協力を必要とするサポートが大切」  
「医療機関の支援，薬物が簡単に手に入らない様にする」
- D,F : 「看身体に及ぼす影響を学んでもらう」  
「薬物をどのようなきっかけで使用したか知る」

## IV: 考察

IV-I: 調査票

IV-II: 自由記述

本研究の限界

# IV-I 考察

## 薬物意識調査票

- 薬物についての関心は，看護学生は薬物乱用防止五か年戦略が影響し高い事が推測できる。
- 看護師の薬物問題への関心が低い可能性として，30代以上が多く薬物乱用防止教育が積極的でなかった。
- 薬物乱用防止教育，薬物乱用者と効果的な教育と重要な支援では，看護学生，看護師共に家族支援を重要視しているが，薬物依存者の様々な問題行動から家族の支援には限界がある事が推測される。
- 小，中，高，大学の薬物防止教育も必要だが，薬物依存者，家族，地域を支援するためには看護学領域での専門教育が必要となる。

## IV-II 考察

### 看護学生：単語頻度分析

- 人，薬物，家族，環境，使用，聞く，が単語頻度の上位であり，他にも周囲の環境を指している単語がみられた。
- 単語頻度から，看護学生は薬物をやめるには家族や環境が薬物使用との関連があり，薬物依存者が家族，病院，施設など良き関係と繋がっている事が大切と推測できる。

## IV-II 考察

### 看護師：単語頻度分析

- 必要，本人，人，薬物，家族，強いが単語頻度の上位であり，他にも自己の意識を指している単語がみられた。
- 単語頻度から看護師は，薬物をやめるには本人の強い意思と，その意思を継続できる家族や周囲との良き繋がりが重要であると読み取ることが出来る。

## IV-II 考察

### 看護学生：ことばネットワーク

- ことばネットワークから看護学生では，薬物をやめるには家族や友人の援助，病院や警察など良き環境の援助が必要であると読み取ることができる。
- 薬物依存者は家族，病院，施設などの良き関係と繋がっていることが，薬物をやめる事に繋がると推測できる。
- 家族との，その場限りの会話ではなく日常からの会話が必要であると読み取る事ができる。
- アドバイスや受けるなどのことばがあるように薬物について学ぼうという気持ちがある事がわかる。

## IV-II 考察 看護師：ことばネットワーク

- ことばネットワークから看護師では，薬物依存者が立ち直る為には，環境よりも本人の強い意志が重要と読み取る事ができる。
- 自分に自信を強く持ち自身で薬物乱用に陥る原因を知ることが必要である。
- 薬物依存者を周囲の良き支えにより見放さない事が大切であると推測できる。
- 薬物をやめる場所，医療機関など薬物依存者にとって，良き支援が必要と考える。
- 薬物依存者が支援体制があるという事を知る事で悪循環を防ぐことが出来ると考える。

# 本研究の限界

- 本研究の限界としてM病院看護師の年齢層の幅が広い。
- 教育課程は看護師，准看護師と異なる。
- H大学20名，M病院20名と小さなサンプル調査である為，回答に偏りがある可能性が高い。
- これらの事から本研究は一般化には至らない。嗜癖の領域として今後幅広く調査を行っていく必要がある。



# V : 結論

## V 結論

- 今回の調査から薬物問題への関心，意識，教育面での影響は看護学生と看護師を比較した際，薬物に対する意識は変わらないが，関心は看護学生の方が高い結果であった。
- 薬物に関する関心が看護学生の方が高い背景としては，1998年から開始された薬物乱用防止五か年戦略による薬物乱用防止教育と大学入学時には薬物乱用に関するパンフレット等の啓発も影響している可能性がある。

- 学習面では，看護学生，看護師共に小，中，高，大学の薬物防止教育は，学校の先生が行っている現状もある。
- 薬物依存者支援は様々な専門職種のカラが必要である。
- 既存の薬物教育では薬物依存者困難となる為，地域支援を担う職業としてアディクション看護における薬物看護教育の必要性がある。
- 既存の薬物教育だけでなく薬物依存者の家族まで理解，支援できる事が地域づくり，薬物依存者支援へと繋がる。

# 引用文献

警察庁組織犯罪対策本部薬物銃器対策課 (2011). 平成22年中の薬物・銃器情勢 (確定値), 2011年7月30日, 引用,

<http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm#yakuzyuu>.

厚生労働省 (2011). 薬物乱用防止に関する情報のページ, 2011年10月9日, 引用,

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/iyakuhin/yakubuturanyou/torikumi/torikumi-gov.html>.

財団法人厚生統計協会 (2010/2011). 国民衛生の動向, 57 (9), 274-277, 374, 東京.

嶋根卓也 (2010). 薬物依存症の予防・防止の社会的取り組み, 日本臨床68 (8), 1531-1535.

株式会社数理システム (2011). Text Mining Studio4,0.1, 操作マニュアル, バージョン4.0.1, 1-264.

Drug Addiction Rehabilitation Center (DARC), 2011年10月8日, 引用,

<http://yakkaren.com/zenkoku.html>.

寶田穂 (2009). 薬物依存症者への看護における無力感の意味, 日本精神保健看護学会誌, 18 (1), 10-19.

寶田穂 (2008). 薬物依存と看護, 宮本眞巳, 安田美弥子 (編), アディクション看護, 74-101, 医学書院, 東京.

# 引用文献

寶田穂，武井麻子 (2005)．薬物依存症者にとっての精神科病棟への初めての入院体験14 (1)，32-41．

内閣府大臣官房政府広報室世論調査担当 (2006)．薬物乱用対策に関する世論調査，2011年10月18日，引用，

<http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-yakubutsu/index.html>．

内閣府 (2011)．薬物乱用対策推進本部，第三次薬物乱用防止五か年戦略，薬物乱用防止戦略加速化プラン，2011年10月9日，引用，

<http://www8.cao.go.jp/souki/drug/know.html#3>．

Narcotics Anonymous Japan (NA JAPAN)，2011年10月5日，引用，

<http://najapan.org/>．

内閣府政策統括官付青少年環境整備担当 (2010)．平成21年度インターネットによる「青少年の薬物乱用に関する調査」報告書，2011年6月1日，引用，

[http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/drug/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/drug/pdf_index.html)．

森田展彰，成瀬暢也，吉岡幸子，西川京子，岡崎直人，辻本俊之 (2010)．日本アルコール関連問題学会誌，12，141-148．